

# 酔 夢 樓 隨 筆 (3)

## 植物の同名異物

川 崎 正 悦

十返舎一九の有名な東海道膝栗毛、小田原の宿の条に、此の宿の名物、外郎店近くなりて、北「オヤ爰の内は、屋根に大分凸凹のある内だ」彌「これが名物のうしろだ」北「ひとつ買つて見よう、味えかの」彌「味えだんか、あごが落ちらア」北「オヤ餅かと思つたら葉だな」彌「ハ、ハ、ハ、かうもあるうか」

ういろいろを餅かとうまくだまされて

こは葉じやと苦い顔する

と云う一節がある、普通外郎というのは、羊羹と餅の合の子の様な菓子である。神戸にも長田神社前に名物の外郎がある。処が小田原の名物外郎は同名で葉である。これでは北八ならずとも間違いそうな事である。世の中にはこれに類する事が中々多いから煩わしい。油虫と云つてもバラヤ菊につく有物類のアリマキもあり台所に居る直翅類のゴキブリも油虫と云うし、おまけに普通種のコウモリも動物学上の名はアブラムシである。シャコも海老に似てよく天婦羅にする甲殻類のシャコもあり、南洋に産する巨大な厚い貝のシャコもあれば、蒙古あたりに居る鶉類のシャコもあるのだからよく確めてからでないかと飛んだ間違いを引起す。

### △ 梅 檀 と 椋

これがよく間違えられる。或る植物採集会の時棟があつて、「これはセンダンの木です。」と云つたら子供連れの人に来て居て、早速拙者の説明を待たず、これが梅檀は二葉より香しの梅檀だと説明の横取りをされた事があつたが甚だ専断な話で、梅檀は檀香料の植物で白檀とも云い、材は香気が著しいので芳香料とし、仏像を彫み或は器物を作り、又他物に香気を附けるに用いる外、薬用として緩和及び清涼剤に使用する。東印度、マレー半島等に産する樹で、我邦には産しない。葉は長卵形で対生し、花は四裂又は五裂した萼片を有する緑白花で、後核果を結ぶ。我邦のセンダンは棟で樗とも書きアスチの事である、全く別科の植物で棟科に属する。暖国の海辺や山地にも生ずる落葉喬木で、葉は三羽状複葉、花は複聚繖花で、梅雨の頃淡紫色の美しい、小花を開き、果実は核果で橢圓形、平滑で秋黄熟する。冬になつて落葉した後でも果実は枝上に残り寒月に照らされて居る有様はいと物淋しく寒むぎむとして、しみじみと冷え枯れた感を懐かせる。此の樹は仏像を彫む処か、昔は三尺高い台の上で首を並べ

て笑いやしようと云つた。其獄門台にした植物だと云うから、梅檀とは、それこそ雲泥の違いである。然し葉を電燈の笠の上に覆うとウソカの多い処ではウソカよけになるし、山形県などでは実を風呂に入れるとリウマチスに利くと云つて使う。然しこの一変種唐楮の方は薬用として導ばれる。日本種の方は、それに似てあまり利き目がないと云うので唐栲木とけなされる。

### △ 雁皮とがんび (剪春羅)

一つは三又、漢名萇瑞香と共に良好の日本紙を製する瑞香料のガンビで、暖地の山地に生ずる落葉灌木で高さ一、五米以上に達し、初夏枝頭に頭状を成して黄色の小黄花を擧簇する。往時伊豆から出した雁皮紙と呼ぶ紙は、このガンビでなく、サクラガンビから製したものと云う。他のガンビ (剪春羅) は石竹科のセンノウの類では往時渡来し、広く庭園に培養されている多年性の観賞草本で支那の原産である。高さ40-90 cm 葉は円状楕円形先端尖り五、六月の候、稍の頂竝に葉腋に黄赤色の美花を開く、勿論製紙原料にはならない。然るに新村博士編纂の「辞苑」に雁皮として此植物の図を掲げ「瑞香料の落葉灌木、高さ二米位葉は卵形又は長卵形で互生、夏梢上に黄色の小花を開き稍頭状花に配列する云々」と出ているが、図は正しく石竹科のガンビだから葉は互生でなく (対生は石竹科の特徴) 花も小花ではなく又頭状花でもない。この説明はさつぱり辻褄が合わないがそれは説明は前記の瑞香料のガンビで、図は石竹科のガンビを描いているからである。

### ● △ 話 草 と 爪 草

話草はオランダゲンゲ即タロバーの事である。シロツメクサとムラサキツメクサ (一名アカツメクサ) とある。昔和蘭人が硝子罎を箱に入れその間隙を、此枯草で詰めて長崎に船載して来たので話草と呼ぶ。爪草はナデシコ科に属する小草で、よく庭に生え、松葉状の細い葉を沢山着ける一名タカノツメ又小僧泣かせなどの方言もある。これは其の葉形が鳥の爪に似ているから名附けたものである。小僧泣かせとは、お寺では中々掃除が八釜敷いのであるが、分けても禅寺では、庭の掃除を叮嚀にする、そこでこの小さな草の除草に小僧が泣き出すと云うのである。

### △ タチバナの二種

一はミカンの古名で一名ヨミカンの事である。冬多く出る普通の蜜柑はウンシユウミカンである。他の一つはマンリョウの類で紫金牛科に属しカラタチバナと呼ぶが植木屋は単にタチバナ、又はコウツと云っている。正月用の盆栽として年の暮の市でよく見掛ける。マンリョウに似て葉はそれより細長く、果実は赤くマンリョウと同じく年を越えても落ちない。

### △ 甘草と雪草

甘草は有名な薬用植物で薬に甘味をつけるに用いる。薬用には走根を使用する。甘いのは葡萄糖を含有する為で矯味薬とする外、緩和薬、賦形薬として用いる。荳科に属し、南部歐羅巴に多く栽培する多年性草本で羽状複葉で数多の小葉からなる。初夏稍上葉腋上に淡紅色の蝶形花を多数繖状に着ける。

荳草はワスレグサ一名ヤブカンゾウ、カンゾウナ、オ＝カンゾウなどと呼ぶ。

荳は忘れるの意で、昔支那で此花を見て憂を忘れたと云う故事があるので、荳草をワスレナグサと呼ぶ。原野の溝畔堤側等に多い多年性草本で、夏季重瓣の黄赤色の花を開くこれに似て単瓣のものはノカンゾウと云う、共に嫩葉は浸物、和物として食する。甘味があつて味が良いので甘菜と呼ぶ地方もある。

### △ 樟 と 楠

楠と樟を同じクスノキと思つて居る人が多い様であるがこれは全く別の植物である、科は同じ樟科に属するが樟は樟腦を採るクスノキで *Cinnamomum* 属、楠は支那の四川省あたりに多い樹で日本にはない。イヌグサ *Machilus* 属で学名を *Machilus Nam* と云う。

### △ 夕顔 と 夜顔

夕顔棚の下涼みの夕顔は瓜科のユウガオで果肉を煮て良い、又カンピョウに製する。夕刻に咲く白い花も中々風情がある。

今一つの夕顔はヨルガオと呼ぶのが正しいのであるが、従来やつぱり夕顔で通つているヒルガオ科の植物で、アサガオに似て夕方白花を開く、一名夜会草とも云う。

### △ 菩提樹

山地に自生するが、よくお寺などの庭に植えてある高さ二丈位になる木であるが此のボダイジュは釋迦が菩提樹の下で教を説かれたと云う、その樹ではない。日本のはカラスノゴマ（田麻）科に属し葉の様な形をした総苞上に、花軸を出し多数分岐して黄褐色を帯びた小花を開き、花後円形の果実を結ぶ。釋迦が其の樹の下で説教したと云う印度の菩提樹はインドボダイジュと云い、葉が心臟形である事は似ているが葉の先き

が非常に細長く突出している、この方は桑科の植物である。

### △ 人參と胡蘿蔔

此の両者の間違ひは、よく講談師等の種になる。薬用の人參を買いにやつたら、頓馬な奴が、野菜の胡蘿蔔を一駄も買つて来たと云う話してである。人參は古来有名な薬用植物で人のよく知る處、五加科に属し支那、朝鮮、滿洲の原産でチヨウセンニンジン、オタネニンジンとも呼ぶ。享保年間朝鮮種を伝えて官園に植えたので朝鮮人參と云う。

胡蘿蔔は野菜のニンジンでセリ科に属する。

### △ スズランの二種

一つは昔北海道函館高女の鈴蘭狩で有名な香のよいスズラン、鈴蘭と云うがこれは蘭科ではなく、百合科に属する。蘭科の植物でキンランに似て柿色の花を開くカキランにもスズランの一名がある。

### △ 矢車草

花園に作る初夏から秋に亘つて藍紫色の花（桃色や白色のものもあるが）を開く矢車菊を普通矢車草と呼んでいるが、これはヤグルマギクが正しい。菊科の植物で、周辺の花が矢車状を呈しているからである。原産地は歐洲、本物のヤグルマ草は、虎耳草科に属し、深山に生ずる大形の多年生草本で、其葉形が矢車に似ている處から名付けられた。

### △ 馬 勃

牛洟、馬勃とは牛の小便と馬の糞であるが、馬勃と云う葉になる菌類があるので飛んだ悲喜劇の因になる。これは東京での話してであるが或老人が喘息で長年苦しんでいたが、知人がたまたま馬勃が喘息によく利くと云う事を、聞き込み、てつきり馬の糞と思いこんで、ひりたてばやほやのやつを布で搾つて、飲ませたが喘息の苦しさに飲み悪いのを心棒して、盃で一杯づつ二回飲んだがどうもいやなげつぷが出るので遂々二回で止めたと云うのである。処がある会合でこの話をした処が同席者の一人が、やはり子供に危く飲ます処であつたと語つた人があつた。馬勃と云つただけでは間違ひそんな事である。ではその馬勃と云うキノコはどんなものであるかと云うと、ヤブダマ又はオニフスベと称するもので、ホコリタケ科に属し、形は西瓜の様で巨大なものは長形三十種以上もあるものがある。茶畑に觸腰があつたと大騒ぎして、よく見たら此の菌であつたと新聞に出た事もある。本草綱目によれば、馬勃は肺病、咽喉等の諸病に有効だとである。

### △ ア ヤ メ

王藻刈る池のなぎさのあやめぐさ  
ひくべき程になりけるかな

などあるあやめ引くのアヤメは今云う菖蒲の事で、五月の節句の屋根に葺き、菖蒲湯に入れる天南星科の植物である。今のアヤメは昔は奇麗な花が咲くので花あやめと云つた。これは鳶尾科の植物、花菖蒲と云うと現今の花菖蒲と今度は混同されるがハナショウブは徳川の中葉、旗本松平佐金吾が奥州安積の沼からノハナショウブを持帰つて江戸堀切の下屋敷の庭に植えるまでは殆ど人の注意を引かなかつた様である。

.....  
猶思ひ出すまゝ同名異物のものを列記して見ると  
ユキノシタ、ゆきのした科、エノキダケの一名でもある。まつたけ科  
アオガシ、バリバリノキとホソバタブの一名くすのき科  
アオカズラあおかさ科、ツズラフジの一名つすらふじ科  
シラキとうだいぐさ科、モガシの一名もがし科  
イワヒゲつつじ科、シシランの一名うらぼし科、又海藻のこもふくろ科にもイワヒゲがある。  
イトモひるむしろ科又同科のミズヒキモの一名でもある。  
どちらがみ科のセキシヨウモの一名もイトモという。  
ウシコロシいばら科、又くろろめもどき科のクロツバラの一名。ヤブミヨウガつゆくさ科、しょうが科のハナミヨウガの一名でもある。  
イママデグサ、うらぼし科のノキシノブ、又イヌガンソク科の一名  
ヤブソテツ、うらぼし科、同科のシンガシラの一名でもある。  
キツノオ、うらぼし科又ヤブソテツの一名でもある。  
ショウキラン、らん科、ひがんな科にも同名がある。  
ヂンベリ、きく科のイヌガナ科の一名、かほん科のツルヨシ同科のメヒシバの別名、  
サルスベリ、みそはぎ科、つばき科のヒメジャラの一名  
イワシボネ、うらぼし科のシンガシラ、アオネカズラの別名  
イワミノ、うらぼし科のシシランとヘラシダの一名、  
ルリイチゲ、きつねのぼたん科のキクザキイチリンソウ同科のユキワリイチゲの異名、  
ユキワリソウ、高山に生ずるさくらそう科の植物、きつねのぼたん科のミスミソウの異名、  
エビスグサ、まめ科又シャクヤクの異名。マキ、いぬまき科のイヌマキの一名、スギの古名、  
スズムシソウ、らん科、きつねのまど科にも同名があ

る。  
コガネバナ、しそ科、まめ科のミヤコグサの別名、  
コガノキ、くすのき科一名カゴノキ、又同科のヤブニツケイの別名もコガノキと云う。  
コマノツメ、ツボスミレの一名、又べんけいそう科のメノマンネグサの異名でもある。  
同名異物中で最奇抜なものはナンジャモンジャである。

### ナンジャモンジャ

あちら、こちらにナンジャモンジャと呼ぶ木があるが、ナンジャモンジャとは、どんなもんじや、と問はれても、こんなもんじやと簡単に答えられない。それは、ナンジャモンジャとは色々なもんじやからである。次にそれらを述べて見る。

#### △ 東京青山の原のナンジャモンジャ

このナンジャモンジャはヒトツバタゴである。今では天然記念物の一つとなつている。ヒトツバタゴとは一つ葉トネリコの意味で、トネリコは一名タゴ(葉は羽状複葉)であるがヒトツバタゴは単葉だからヒトツバタゴと呼んだもので、支那や朝鮮には多い木であるが日本内地には極めて少い(対馬、美濃、尾張には稀に野生がある)東京に大樹となつて存在しているのは頗る珍らしいので天然記念物に指定されたのである。此の樹のある処を昔六道の辻と云つたそうで、一名六道木とも云う。五、六月頃四片に深裂した白色の花を開き遠くから望めば宛も雪の様である。

#### △ 筑波山のナンジャモンジャ

つくばつてさえ筑波山、突つ立つたら空もつんぬくべえと土地つ子の自慢する常陸の筑波山にもナンジャモンジャがある、それはアブラチャンと称する小木で、此の植物は果実並びに樹皮に油を多く含み、能く燃えるので油とチャン(滷青)とを合せて名としたもの、山林中の雑木である。早春枝上に葉に先立つて細い黄色の花を開き、秋小花に似合はぬ円い大きな実がなるそれで吹玉の木とも呼ぶ。

#### △ 暖地の海濱に多いヤブニクケイ

蕨肉桂もナンジャモンジャと呼ばれていることがある、ヤブニクケイは、九州に最もよく繁茂している樹で、本物の肉桂の様な辛味なく香も淡い。

#### △ 那智山のナンジャモンジャ

紀伊の国那智の入口にも、ナンジャモンジャ一名シマクロキと呼ぶものがあるそうだが、実物を見ないから何と云う木か久しく解らなかつたが、昨年大阪の科学博物館の堀勝氏に尋ねた処それはイスノキ一名ヒヨノキなど教示された御蔭でこれもはつきりした。イ

(以下171頁へ)